

宝暦明和の大阪騒壇：列仙伝の人々

中村, 幸彦
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/12336>

出版情報：語文研究. 9, pp.1-10, 1959-09-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

宝曆明和の大阪騷壇

— 列仙伝の人々 —

中 村 幸 彦

試みに宝曆明和時代の三都文壇乃至は文化界を想像して見るに、京都・江戸はおぼろげながら、その輪郭を描くことができる。しかし大阪は一向に明らかでないのは、私のみではないやうである。京都や江戸は、その地に永住又は半永住の、漢詩文・和歌・国学・俳諧・戯曲・小説など専門家又は準専門家を中心に置いて詩壇・歌壇・俳壇等、乃至は文化圏が考へられるに對して、大阪は、宝曆明和期に限らず、その後も同傾向を持つが、専門家には仮寓の人が多く、彼らは屢々出入し、彼等を中心に描く圏は又屢々変化する。むしろ大阪の文化界の主体は、専門の師家の側になくて、それを後援し従学する素人の側にあつたと解さねばならぬ状態なのがその大きな原因ではなからうか。

そうした中で、宝曆明和の大阪の文化界の母体を察する一資料に

宝曆癸未（十三年）冬日刊の洒落本列仙伝がある。この書は洒落本に分類されてはゐるが、内容は遊里に直接關係しない。孔子の使で子路が、日本の粹道を視察に来る。我が古代の粹人達が歡迎して、和歌・俳壇・粹人の現状を大略語つて、歡迎の為に「中ウ芝居の淨りかぶき」を興行して見せることになる。そこに演技者として見物人として集るのが、悉く当代の通家であり風流人である。既に洒落本大系などに翻刻もそなはる故に細叙しないが、その人々の紹介が、この書の主目的なのであり、これによつて当代人は、大阪の文化界の一端を察したのである。

今、詩人を云ふ騷人、詩壇を云ふ騷壇の語の意味を、拡張して、この風流人の集合を称することを許されたい。がその騷壇権成員は、殆ど実名をもつてせず、やや変へた所謂モデル小説的変名で示されてゐる。故に従来、その数名を除いては、不明の中に残され、誠に隔靴搔痒の感があつた。しかるに、大東急記念文庫蔵の一本には、約半数の六十数名について、実名が注記されてゐる。恐らく同時代

人、もしくは一ゼナレーション程おくれた人の手になつたものであらう。銅脈先生の狂詩集、太平楽府にも、これに類した同時人の注記があつて、甚だ理解の助けとなつたので、天理図書館から狂詩狂文篇を出す時、その注のままに印刷に附したことがあつたが、この注記からも同様な利便が期待出来る。

ただし太平楽府のは世態風俗に関するもので、その注によつて大略は察し得るも、この列仙伝の人物は、実名によつても、なほ二百年をへだてた今の我々には他人である者が多い。当時の雑書を求めて調査をして見るが、依然不明のものが残る。私人が蔵するよりは、現段階でわかるのみを貧弱ながら報告して、大方の援助に期待すべきではないかと、筆をとることにした。

大東急本に注記があり、又注記なくとも、ひそかに該当者の想起出来る人物を、登場順に紹介して、若干の補記を加へてゆく。援用する雑書は、翻刻あるものは自ら疎に、又は書名のみで省略することもあるかも知れない。未翻刻の引用の文は、同好の士の労を思つて、成べく原本のまま出すことにする。見出しは列仙伝のまゝ。括弧中は大東急本の注記、括弧のないものは従つて大東急本に注記を欠くものと思はれたい。

二

○半談翁。俳人松木淡々であることは従来から明らか。以下孔子の門人が三千人だが自分が三千二百人あると云ふ話も、上田秋成の胆大小心録の記事に合すと、この淡々のことによつたのである。彼の

逸話は大阪の人物にふれたあらゆる本に出てゐると云つてよい。

(摂陽奇観・宝曆雜録・当世癡人伝・摂陽落穂集等) 正しい俳歴などは瀨原退蔵先生の俳諧史論考所収「享保俳諧の三中心」や、近く木村三四吾氏の松木淡々(俳句講座3俳人評伝下)にあるので省略。宝曆十一年十一月三日没で、この書の出た時は既に故人であつた。

○周章(シウキヤウ、長源)。胆大小心録にも淡々の豊かな弟子と見える秀鏡のこと。この人は俳諧の外にも通人で、歌系図によれば、「かくし題」の作があるし、虚実柳巷方言(寛政六刊、以下「方言」と略す。浪速叢書などに翻刻)の「前後混雜列不同先大匠株粋株」の中に、「長源」と見えるも同人であらうが、長源と略した通称の全体を未だ明らかに出来ない。

○嗅穴(カグホラ、小国吉)。注記の「カグー」は「カブー」ともよめるが、なほ「カグ」であらう。俳家奇人談の淡々の条にも見える高弟、嗅洞(かぐほら)のこと。淡々文集に「嗅洞亭に遊ぶこと葉」があつて、姓は高岡氏だが、これも小国吉のみでは通称未詳。

○しろさだ(クロサダ、日藤)。

○どうれん(ショウレン)。大阪では著名な俳人小野紹廉。誹諧家譜などにも出てゐるが、宝曆十一年十月十四日没(大阪訪碑録等)で、又既に故人であつた。

○五盃堂(五彩堂)。誹諧家譜によれば、椎本矩州の号が五彩堂。椎本芳室の後をついでゐたことは云ふまでもない。

○村川武天(浦川富天)。大阪で淡々の後継者となつた人物で、誹諧家譜は勿論、何にでも見える人物。明和五年五月十日没(浪華人物誌)。

○ぎやうさく。これも俳諧家譜につけば祇空門で大阪で宗匠と立つた仲上法策がある。この人物に相逢なからう。

○かくう（ハクウ）。宝暦五年五月十六日（浪華人物誌）没した鹿島白羽。紹廉門の宗匠である。以上の如く撰集の一つもある宗匠達は兎も角に明らかなだが、その門人達になると、白羽門のしうかは周禾、法策門の如洞は魚洞、土馬は五馬と、当時の俳書によつて實際の号にもどし得るが、それ以上に進展しない。その中にあつて、

○鬼上（キセウ、鉄庄左エ門）当時活躍した俳人中から几掌の文字をあててゐる。この人物は鉄屋莊（庄）左エ門と称して紹廉門、二世一炊庵、別号万翁なることが、浪華人物誌、新撰俳諧年表（錢屋とあるは誤植か）でわかる。書入、庄の文字竜の草体にも似るが、なほ庄であらう。鉄庄とすれば、後出の富家の粹人傑や興左エ門と同人となる。

○ぞゑん。は漁鳶と号した若き日の上田秋成であらう。なほ漁鳶の称は方言の「名家」の部にも、彼の友人、兼葭（木村兼葭堂）、十時（十時梅涯）などと共に見える（拙稿「上田秋成青年時の俳諧」——連歌俳諧研究第十輯）。

○きやうご（ラフゴ）。

三

俳壇を去つて、通家の条に入ると、

○森田幸助・石場宗介・鶴井与八・大西平介と暫間の名がつらなる。これらは実名のまゝであつて、浪花色八卦（宝暦七刊）にも

「森田幸介をはじめ平助・喜六・宗助・与八・松治・音太夫・伊勢太夫其外数もしらす、利八隠居して日養坊となりたるも興也」。川童一代嘶（寛政六刊）三にも江南（島の内）の遊びを述べて、「幸介・惣介」と並記する。皆、大阪南の花街の暫間達である。撰陽奇觀三十一にのる「やくたい芸十人」の中、「森田幸介が犬」「石場惣介口笛」とあるのは彼らの得意芸を示したものだ。

○三つ子（三つ子兄弟、袴庄七・同平八）。よくわからないが、撰陽奇觀によれば宝暦九年十月御用金を出した富商の中に、袴屋弥右エ門・道修町の袴屋仁右エ門がある。そのどれかの家の人々であらう。

○方々往弁右エ門（鴻池善右エ門）。云ふまでもない今橋二丁目の富家だが、時代から考へ「当時病氣にてしばらく立かた断りて御ざれば」の文句によつても、翌年の明和元年三月廿六日没で、茶人宗知として有名な山中利永であらうか。

○傑や興左エ門（鉄庄事）。瓦町の富人鉄屋庄左エ門で、前出宝暦九年の御用金の名簿などに見える。俳号几掌なることは前述した。その弟○きめ治郎には「弟亀次郎」と注がある。

○茶向（タムケ）。「べんけい」即暫間であるが、方言の「大戻株」の中に「手向」とあるが同人物。

○淡崎屋ゑん兵衛（川崎や源兵衛事）。これも宝暦九年御用金を出した一人で、歌系図に「京小袖」の一曲を作詞した川崎屋源兵衛も同人物か。当時はまだ青年と見える。

○毛先は左エ門（江崎茂左エ門事）。江崎は当代に聞えた大鼓・三味線の名手である。宝暦九年三月十七日天王寺南門の能で、一流に

伍して嘩方に加つてゐる（撰陽奇観）。それよりも彼は奇人でも通つてゐた。「茲編に出す痴人は寛延宝暦明和までの間にみまかりに粹をつかひて今はなき人の數にいらたる人」達の逸話を集めた顛魔道人（この人に狂詩集黒珂稿の著がある）編寛政七年刊の当世癡人伝巻一から引用しよう。

江崎氏は大鞍を教えて業としられしなり、其技能堪能なりし事世のしるところ也、もとよりその行ひ放逸にて、つねに道具を質に置ありしゆへ、楽屋にて他人の大鞍を借てうたれしによつて、おもひまゝに皮をほうじることを得ざりしかど、其しらべ格別なりしとかや、此人北の新地の痴人にて通はれしが、親かたせきて戎嶋へ仕替にやりしかば、江崎毎日籠飯にて、塚までかよはれしとぞ、又或人の居催促したるに巴豆を煎じて茶に和して飲されし、又ある時門人謝礼を金千疋もちきたりしを、内室にかくしを咄し居られしに俄にそらのけしきかはりしきりに雲起り、夕立しのをつくごとくに降きたりて、彼千疋の金戸極よりながれしと也、此人三味線甚だ妙手にて、中古の岸野二郎三にもおとらざる名人なりと、その頃小野川検校賞美せられしとなり、ことに寛瀧一休小むらさき花筏などおしものなりしが、幾度聞てもあかず、面白かりしとぞ（編者の感想が末にあるが略、その中に「嗟、江崎氏さりてより寰宇寂として音なきに似たり、永三氏よりしもつかた端うたは聞もすべし、長うたは論なし」の文がある）。

列仙伝の文中「六十におよんでいまだ色事のげん気おとろへず」とあるに照合されたい。それにしても弁当行李を持つた女郎買もおかしい。この癡人伝は半紙本五卷五冊で「寛政七歳卯正月新刻 江戸

通油町鶴屋喜右衛門・京都御池上ル町吉田新兵衛・大阪心齋橋南久宝寺町角塩屋長兵衛」の奥附を持つ。後に近世崎遊伝初篇上下二冊として、序と挿絵を變へ、跋をのぞいて、「文政八年乙酉九月

大阪書林心齋橋通博勞町奥田弥助」から改題再板された。本文は書名の部分のみ入木変更したのみで、癡人伝のままである。浪速人傑談（高安蘆屋の条）などに、近世痴人伝・近世崎遊伝として引用するが、当世癡人伝と引くべきであつた。高安蘆屋を伝された森鏡三氏（新橋の狸先生）は典籍作者便覧によつて、この書が万葉集見安補正の著者池永泰良の近世癡人伝記と關係あることを述べられた。

その見安補正を後に校補した上田秋成の処女作諸道聽耳世間猿（明和三刊）巻二の三「呑こみは魁一口の色茶屋」に出る「家嶋与左エ門とて四座の末のすかんびんうつ鼓の、ふつともほうともならずもの」は、この茂左エ門をモデルにしたものであつた。

○ていふ。川崎屋の支配人で昔は粹人だつたと見えるが、方言の「大尺株糲株」中の「セイフ」がその人か。

○すべた和三郎（上田弥三郎事）

○はづみやゑん右エ門（泉新右エ門事）。宝暦九年の富人の中に見える淡路町の和泉屋新右エ門。この人「いづ新」の名で通つた通人で、方言の「大尺株糲株」の条にも見え、又「小つゞみ」の条には「いづ新素人にてよし」とある。とすれば歌系図に「我身」の作詞家「いづ新」もこの人であらう。

○なぶろや治兵衛（油次事）。宝暦九年の御用金以下、買上ケ米などに鴻池などと名をつらねる富家上人町の油屋治兵衛。

○きははいや仁兵衛（岩仁事）。この人物も癡人伝巻四に「しらげ

(白髮) 町の際や仁兵衛」として見える乱舞と茶の湯の上手であった。これも同書を引いておかう。

しらげ町の際や仁兵衛といふ人。乱舞と茶湯とは大名人にてありし、何れも道具衣装かねにあかして拵られしなり、又髪結事甚すきにて、名にしおふ大吉わげを結はしめたる姉川大吉の金剛を大金を出してかへられ、自分も弟子となつて髪を結れしなり、御家から嬖中居まで、みな／＼自身ゆふてやられし也、家内芝居などみせにやらるゝ時は夜とほしに結ひてやりて棄とせられしなり、此人その男の美麗なることまことに古八方ともいふべき骨柄にて、しつと落つひたところ古今の旦那なりしが、ひとつの失は甚だ文盲にてなり、或日さる御屋舖の留主居を請じて茶湯ありしに、此留主居花いけを着ると、銘がこさるかとなりしに、際仁答て、なるほどハンセウと御座りますといふに、留主居この字におもひあたらずして、文字はいかゞ書て御座るとあるに、際仁こたへて、返魂丹の返の字と天照太神宮の照の字とを書て御座りませといはれた。

○天川多物(下物)。「今北の新地で粒の神様のやうにいふ」とある如く、誠に便利な人物であつた山川下物である。又稚木を名のつてもゐる。失礼な比較を肯へてすれば、当代の徳川夢声的存在である。方言でも「名物」の条と、「雑俳」の条にのる。勿論、当時の大阪雑俳宗匠の名審誹著耳勝手(宝曆七)などには二斗庵山川下物の名は加つてゐる。安永頃の素人の噺会が盛んになると、引出されてそれに関係し、安永五年にその佳作集年忘噺角力五巻を岡本対山と編してもゐる。よつて粒のたもと(安永九刊)に附された一交

粹衆二十四輩并和讃の一人に加つて

顔見せやよその命の二人前 下仏

とある。和讃と称するこの句中に彼の楽屋落があるらしいが、劇場にもしげく出入したことだけは、この句面からも確かである。享保以来大阪出版書籍目録の宝曆十年の条には、猷立笠など云ふ書物の作者となつてゐる。

○うりう。この列仙伝のあの世版とも称すべきに雅仏小夜嵐中木一冊がある。早く尾崎久弥氏の江戸小説研究に紹介がある。宝曆十二年五月二日に没した根津四郎右エ門が、極楽へ行つて、この世での知人に逢ふと云ふ筋。尾崎氏は明和初めの刊と推定されてゐる。極楽で先づ四郎右エ門を出迎へた三人の中に、やはり「うりう」の名でこの人物があり、次のやうな懺悔ばなしをする。

いきを引とるそのきは迄、おれほどなすいはない。此うりうほどなものはないと身上りしていたが、すつきり皆時代らがひであつた、前砂原で人のかいた絵をはめるはなしに、山水の寫が見事じやと云たれば、皆袖引て笑ひおつた。よその事じやと思ふて居たが、よふ思へば草畫といふを山水と心得たがおれが庵相、女房持かへたもぎつとしくじりてごんした、(極楽で「まはり方のおさへやく」をすることを述べて)、わしはしつていやんす通りびんつきと目つきはなんぞものが有そふに見ゆれどとなんにもなしじやによつて、おだやかに極らく廻りの供をするじや

と。ここに癡人伝巻二「万金丹」の条に見逃し得ない一条がある。主人公万金丹が「瓜生が処で生嶋屋の富といふ京から仕かへに来てゐる奴」に逢う条で「瓜生八坂町ノ茶屋ナルコト世間狙ニミ

ニ、伝ハ二編ニアリシ」と注がある。瓜生はどうやら実の呼び名で坂町の茶屋であつた。世間狙は勿論前にも出した秋成の著述、その巻四の二「評判は黒吉の役者付あひ」の主人公は、京の劇場街に近い宮川町の茶屋瓜生となつてゐるが、実は道頓堀に程近い坂町の茶屋をかへたので、「加茂川の水にあくの抜けた糖の果」の女房も登場するが、小夜風に云ふ替へた女房に相当しよう。秋成のモデルとなつた何人かが列仙伝中に登場するが、モデル問題は別に稿をまうけることにしよう。

○銀波（キンハ）。雅仏小夜風にも逸風こと逸鳳の藤川平九郎の言に「此芝居もいきにくかつたのを、玄粧様のお世話で、北の錦波様からかねが出て、どふやらかふやらつゞきました」とある錦波と同じ、北即ち堂島で、役者の後援などした人物であるが、本当の号は、宝暦八年の俳書はなしあいて等に見える金波であらう。も一度「てゑん等」の条にこの人を上げよう。

○麩食七兵衛（コジキ）。ひどく柄の悪い名であるが、当人のせいであつた。浪花見聞雑話なる写本に「乞食七兵衛」として、

乞食七兵衛といふは相場師にて、折々は相座の動く程成売買をす、平日は鹿服を着て、常に草履わらんずなど自ら造りし也、此故乞食七兵衛と言。

とある相場師。

○讃岐の困の烏方（サマキヤシキ留主居ウカフト（云）人也）。讃岐藩の資料によれば明らかになるのであらうが、今は未詳。

○けつ水。浪花色八卦に蜷川曾根崎新地の茶屋を上げて、

中にも菱屋善五郎といふうがちがしら、客とともに遊んで、び

らをいわず、てつ水といふ俳名の通りたる茶屋は浪花に是ばかり也。

と。色八卦は実名を用ひるやうに思へるが、すればこの新地組の「けつ水」はてつ水こと菱屋善五郎なる茶屋であつた。

○由新（油新助）。

○ため武（亀武）

○伊村宗民（木村東民）。

○艾甫（退甫）。安永四年の浪華郷友録、儒者の部に「新山退甫

近江町、新山退字退甫号紫輪又号天橋堂初号六足善相人」とある人であらうか。安永四年七月廿八日、五十三で没した。この人相をよく見た人の墓は六万休町の天鷲寺にあると、その碑文と共に大阪訪碑録は報じてゐる。奴の小万がこの人に人相見を学んだとも云ふ。

○川波僧助（川上）。雅仏小夜風に川上洞州があり、大阪訪碑録には川上静庵なる国学をやつた当時の人があるが、未詳。

○青春（尚春、鴻池半二郎事）。

○浜六（玉六）。

○李棟。癡人伝巻二に、この書中でも最も奇人に属する李東なる食客になることの名人があるが、この李東には目一つで大坊主と云ふ記事がないので、同一人とするは暫く保留する。

○竹田唐軒（武田弘軒）。

○木津の土仙（木津願照寺ロセン）。

○嶋や和五平（嶋や孫平次）。

○九調（フテウ）。

○翠舟（マス舟）。

○鉄義(鉄キ)。

○麟之介(いづりん)。

○惣田余平(正田与兵へ)。正しくは庄田、この人物も前出の江崎茂左エ門と共に宝曆九年三月十七日、天王寺の能の囃方に出てゐる。方言では「名人」の部に「庄田」とある。そして又秋成の世間猿卷二の三に茂左エ門の家嶋与左エ門の友として出場する幸田嘉兵衛なる狂言師も、この人がモデルであつた。

○尼崎えんくは(尼崎屋五兵衛)。

○こゑん。すいかう。小夜嵐にも同じ名で見える。

大村やのふきといへる呼びや、相替らず大きな尻でエラ呑、すいこう、こゑん、ゆうめい其外のぐはん(判官即ち大戻の意)たち、落込の大だて、錦波物好にて、古けれと豪がしらといふ名代で、女郎まじりのかぶき芝居

と、前出の芝居後援者錦波こと金波と共に、北の人で芝居好の面々であつた。よつてこの中芝居の催に「生て居たら嬉がるに」と述べたのである。

○とうてい。小夜嵐に「若吉が座敷には有明がうがち立テ、東亭と弄明す」とある、東亭と同一人物であらう。

○艸高といふ大儒。音から見て東亭と号した橋維嶽(安永四年浪華郷友録)かと想像したが、やはり在高、桂井蒼八であらう。彼のことは近世末刊本叢書狂詩狂方篇解説にも述べたが、当世癡人伝巻四・大阪訪碑録・摂陽奇観八・同三十二・世間自慢顔などに見え、滑稽離黄(宝曆九)・感断醉裡(宝曆十二)・古文鉄砲前後集(宝曆十一)・蝶嬢教帥(未見、摂陽奇観三十一)などの著があり、明

和二年五月十一日、酒によつて溺死したと云ふ。小夜嵐に

ゆだうふのかんばん、仕出しもちのあんどう、是はかつらいの手じやが大かたこゝらで有そふな物とのぞひて見る、料理やに茶碗でぐつ／＼とのみかけてゐる見れば則かつらい、亭主らしいものが申先生様なんにもさかながござりませぬといへば、かつら井イヤ／＼もふ何ンにも入らぬ大きな鉢に水一ぱいたも、それをさかなにいたすじや、ハテおれは酒と水とで此めいどへ来たのじやとよねんなきてい

とそのことをうがつてゐる。俳優中山文七の師で、狂言作述にも関係した人らしい。

四

いよ／＼芝居を演技しようと思ふ人物が登場する。これには各々の口上があつて、その人物の一端をうかゞへる者が多い。

○秘事谷長兵衛(藤や長兵へ)。癡人伝巻五に野沢藤兵衛の見出しで、「野沢氏は列仙伝に劇主をつとめたる人也、家は高麗橋にありしが」と、この列仙伝のことが出てゐる。以下にあるいくつかの逸話は割愛して、雅仏小夜嵐にも、極楽の東西の門に顔が上るとして、逸東と朱平(後出)がこれに大字を書き時、「秘事や錠兵衛は下袴にて暴すり役にて万事のさはい」と見えて、かうした場に世話を引受けることが常の人物だつたらしい。

○川又ぼう慶(川端平四郎)。川童一代噺(寛政六、徳川文芸類聚第一巻に翻刻)即ち河内屋太郎兵衛こと河太郎の逸事を編した中

に、その巻五にこの人物が「川はたぼう慶」として登場する。これは法体名でもとは河内や慶四郎とて、髯長勝柳・小水屋四七郎・竹本屋好兵衛・綿屋ふん兵衛・小西屋山五郎と六人組で、

わけて慶四郎は、六人の中の最大の飛上りにて、一町内をかけたまはりては、七月にはそろへとうろうにいろ／＼の紙細工、きぬばりの人形に趣向を付て出し、夏祭りにはぎをんばやしをしたり、又は寺かたの打敷をかりて、はだか身の前へはさみ、角力取のふんどしにして、土俵入のまねをして行など、住吉まつりの下向には、明た酒樽を竹馬にく／＼り付て、ちやうちんにしてもどるなど、みな此連中より出しほたへ也

とある。末にこの慶四郎の南のきつしり（情人）が、京都の去方に落籍されたのを河太郎の世話で一緒になれ、二人は河太郎を活命の恩人とした一件を述べた一代噺は、

夫より昼夜そばを放れずかしづきけるゆへ、川太郎にはなれぬといふ心にて、川はたと云けるが、後に法体して慶四郎の一字をとり、ぼう慶し名を改め、相かわらず野等中間へ顔出して楽しみける、遊所へ町より付ゆくを誹慶と号しも、川はたぼう慶よりいふとの昔がたりも

と結んだ。後出する蜀山人田蔵の写本談笑「三好正慶よめ入の事」の条によると、「川はた平四郎とて狂言師なりしが、今は剃髪して道慶といひてかの辺にさまよひ居るに、近頃は中風を病みて甚だ足もとは寛束なく、ふとき杖にすがりてよ／＼其辺を往来せしが」とあつて、正慶尼こと奴の小方が京都の上田近江に一時嫁した時に仲人になつたとある。こんなゴシップはこれだけでは信じら

れないとしても、これで法体名の道慶なることがわかるが、川内やは河内屋のもちりであらう。

○竜の日栄（竜の一下）。書人、「一下」が「下」と見えるが、一下であらう。癡人伝巻三には「竜ノ一達」として出る有名な辨慶即ち太鼓持である。伝には幽地と云ふ大臣に色の白くなる薬とてわけのわからぬものを毎晩塗らせ、芸千太鼓に色が白くなつたと云はせて二十両ふんだくつたと云ふやうな記事数条をのせるが割愛する。列仙伝の前の方に「コリヤ一達が解毒散もはだしじや」とあるのも、この人物に関係するか。

○可。方言の「名物」に「ベイ」とある人か。

○名美谷椿陽（ヤベヤ平介、ホヨウ）。名は純、字は平介、一に陽陽と号した書家牟岐述斎である。小夜嵐にも「榎葉」で出、上田秋成の癡辭談にも引合に出されてゐると云ふ（森川竹窓状）。「少し小むつかしい所」と云つたのは、やはり書家だからである。粋のたもとの二十四輩の、

竜も出ん机洗ひの水の面 蓋陽

も句中に自ら書家の意が出て彼のことである。

○三升十明（舛や理兵衛、有明）。口上によつて酒屋と見える。小夜嵐に「若吉が座敷には有明がうがち立テ」「すいこう、こゑん、ゆうめい其外のぐはんたら落込の大だて」とある皆、同人物。

○園池素道（とんどフ・カウ長）。

○永井繩つら（小野永元）。

○石田沖西（吉野や長兵衛）。

○赤川重斎（中川収斎）。小夜嵐には「中川中才」。

○藤川社夕（ハイイ人社筆）。誹諧家譜によれば布門門下の柳原社筆。誹諧耳勝手の雜俳の宗匠にも入るが、当時の俳書には活躍する人物である。「しばらく誹諧芝居の座本」をしたと口上のあるは、宗匠である以上に何かをやつたやうにも思はれる。

○雜葉谷士山（丹波山宗助）。

○泉屋必（泉必東）。名は貞、字は恒卿、新興蒙所門の書家、明和元年十二月十日没（浪華人物誌、大阪訪碑録）。穿当珍話（宝曆六刊）に「必東の手跡にて比言指南と書付あり」とか、前出した小夜嵐にも「逸東」として、次の周平（朱平）と並べられてゐたり、撰陽奇觀三十一の「やくたい芸十人」の中に「必東先生手跡」、同「やくたい芸自慢」に「必東先生詩作」などあつて、江戸の三井親和のやうに一般に評判のあつた書家であつたのは、「唐団のやうな顔」で粧界へ出入したからであらう。

○香屋の周（ニヲホシウヘイ）。通称を新興周平と称した書家、牧夏嶽。名は世儀、字は升庵と云ひ、必東と同じく蒙所の門。宝曆十三年七月十一日歿（大阪訪碑録）。必も「わたしと狂言をはり合ました」と口上するが、小夜嵐と云ひ、浪速人傑談（新興蒙所の条）にも二人を並記してある。撰陽奇觀三十一の「やくたい芸自慢」に「新興肉（周の誤か）平浄留理」とあるは、この人の趣味を物語る。

○竊屋の亭（クハクテイ）。例の郷友録の画家の部、「五字庵 高津南瓦屋町、釈浄光、宇海眼、初名博字惠達、号雀亭一号寿米翁」とある人物。列仙伝によると草画の上手であつたことがわかる。

○五ツ屋岳（五岳）。列仙伝の騷壇では最も有名な一人画家福原五

岳である、名元素、字は子綯、大雅の門で酒ずきはその兩名と共に有名。

○伊津や雪（女ダテ木津や）。木津屋の雪こと奴の小万、後の三好正慶尼である。浪華人物誌や名家略伝、雜誌上方百九一号等に伝があつて詳かなほもれた資料に大本三冊の談笈なる写本があり、各冊初めに大田南畝が「蜀山南畝集」、「蜀山南畝編」と自らしたゝめる。彼が在阪中に購求した書の一であらうか、専ら上方の雜話の集である。その中「三好正慶よめ人の事」の一条があつて面白い。次の○吉じや吉じや（吉三）も談笈によれば、正慶が一時愛した俳優風吉三郎とわかる。同書に、

其頃浜芝居に吉三といひしは今のあらし吉三郎なり、此者をいたわりてあわれみ、昼夜側近くまねきよせて、我が宅へもよびよせ寝泊りなどいたさせしを人々わけ有事といひあへりしかども、正圭（ママ）少しも屈せずしてなをくしたしむ事ふかくして昼夜とふとん堀の辺に日を送り居たり。

安永九年十二月八日四十四才で没した初代吉三郎である。

○柳里（柳沢）。柳里恭こと柳沢権太夫。昭和三十三年六月発行の大和文化研究は大冊全部をこの人の特輯にあててゐる。詳細を説く要はなからう。柳里恭と正慶尼の關係は当時から色々とりざたされ、上田秋成が世間猿三の一「器量は見るに煩惱の雨舎」にモデルとした。この柳里が竹の画を送つたとは彼が竹の画得意としたからであるが、吉三郎の胤をやとし男子を上げた初節句のことをうかつたとの説もある。

○竹本双紙太夫（象牙口かも）。

○あらつな三藏。癡人伝巻三に唐綱として見える「此人はむかしの
座戸の前の腕箱祇園の願西ともいふべきくらゐの弁慶」とあると同
人であらう。癡人伝の記事は略して、粋のたもとの二十四輩に

血祭や曰て夢見る新茶時

唐綱

のみを引いておく。

○玉田連治（袴社中）。

○末原太助（袴庄か息子）。

○か賀太市（かゝや太吉、喜市）。

○定野林十郎（葛や林十郎）。

五

一人一人の伝を詳らかにするのは本稿の目的ではない故にこれでお
くが、列仙伝の著者一人でないかも知れぬ！がある角度で見た視
野にかくも多様の面の人物が入つて来、その多くが風流引いては文
学に関係してゐる。ここにこの時代の大阪の文化界の特色を見出さ
うとするのである。も一つ癡人伝から引用しよう。巻四「大村屋権
右エ門」の条の附言に、

肝癖先生の語に曰、このごろあるもの妓をこふて、問ていふ、

そちの息子は（コレハ妓ノオヤカタヲ云ナリ）今はなにが業し
じや、ちつと人形でもつかふか、扇の手は眠獅の弟子か、俄がす
きか、谷（組のこと）は誰の谷じや、拳は菊組か、哥三味線はバ
チか、そして全躰色はたれじやとありしに、此妓微笑着、今の世
界にたれかその様な古風なことしてと御ざりませふ、こちの息子

さんは心学とやらにきつうこつて、此間はもつはら篤実をつかふ
て、御座ります、しかし経済とやらでひまのおかずは大かた海布
や雪花になりましたとこたへき、この話聞にも、当時の親方の仕
うちをおもふにつけ、大村やかむかしを忍びぬ

とある。記憶のよい方はすぐに上田秋成の癡癖談上に相似た文章
のあつたのを想起されるであらう。ここの肝癖先生とは秋成その人
である。癡人伝の編者が直接聞く所とすれば、奈良が、この書の編
に關係ある傍証とならう。その癡癖談には、又別所で、

儒者は、詩文の風流こそ日々にさかんなれ、むかしありし師の
ごとく、こゝろおかるゝはなく、おほかたは、通を専らに、秀
句、口あひなど拍子よくいひ興じ、酒をかく酌みあそび、さら
ぬはまた古本、古筆のうりかひに利を射る。

と儒者引いて高級知識人が通人ぶることに浮身をやつすを述べ
る。花街の亭主までが心学や荻生徂徠・太宰春台の風をうけて、経
済の学をやるのは、この頃の大阪の風潮である。まして一般町家の
間にも有志の者は学問文芸をこころがけた。高級知識人の通人ぶる
は宝暦明和の時代の流である。江戸は勿論、京都の書生もしかり、
秋成の知人田宮仲宣の熟うり巻一には、当代京洛書生氣質をうが
つてゐる。

この雅俗交又の中のをさまを列仙伝や小夜嵐や癡人伝は示してゐ
る。秋成や奈良の学問や文学の基盤となつたかうした具体的なもの
への考慮も必要ではなからうかと、やや好事的な操作を、不完全な
がら試みたのが本稿である。これらによつて大阪文化界又は文壇の
性格を説くことも別稿に残さう。

——本学教授——